都市の成立起源と成長過程

――門前町長野と城下町松代の場合――

石澤　孝

I　はじめに

1990年（平成２）における長野市の人口は347,026人である。人口30万人以上の都市[1)]は全国に65市あるが，長野市はそのうち51番目の人口を有している。長野市というと，仏都と称されるように，古くから善光寺の門前町として日本全国に知られている。確かに善光寺は古くから幅広い階層の人々の信仰を集め，現代においても一地方に限定されない広域的な信仰圏をもつ寺院である。その機能は，単に信仰にとどまらず，長野市の大きなシンボルであり，また市民の心のよりどころの一つとして社会・経済的に多大な影響を及ぼしている。その意味で，善光寺は長野の都市機能全体に関わっているといっても過言ではないのかもしれない。しかしながら，現在の長野市において門前町としての伝統的景観がみられるのは善光寺近隣の大門町から元善町にかけての地域に限られ，また石澤・小林（1990）が指摘するように，長野市における都心の核心地域も善光寺門前町からJR長野駅付近へと次第に移動しつつある。これらのことから考えると，近年の長野市の都市機能においては，善光寺の門前町としての役割が小さくなりつつあるといえる。さらにまた，現在の長野市は，1966年（昭和41）に２市３町３村を廃し，これらが広域合併して成立した新長野市であり，異なる起源を有する複数の都市が合併して成立したものであるということは，意外と知られていない（第１図）。

我が国における主要都市の起源の多くは城下町であるといわれている。浮田（1983）は，明治前期における主要128都市の起源を分析して，近世に城下町であったものまたは発生的に城下町であったものは全体の68.8％の88都市，港町は18（14.1％），その他の歴史的都市は17（13.3％），幕末以降の新興都市は５であり，城下町が日本の歴史的都市の主流をなしている。江戸時代の主要な城下町は，明治前期にも主要都市として存続していると述べている。さらに彼は，最高時に10万石以上の大名が存在していたのに明治前期に主要都市から外れた城下町として，福島県二本松，千葉県佐倉，埼玉県忍，石川県大聖寺，福井県小浜，長野県松代，京都府淀，長崎県厳原の８都市を指摘した。浮田が指摘した８都市のうち，その名称が市町村名からも消滅してしまったばかりでなく，都市域の中心としての役割をも失ってしまった城下町の一つが，長野市の松代である。

以上述べてきたように，長野市は門前町を起源とする長野地区（旧長野市）や城下町を起源とする松代地区（旧松代町）などが合併して成立したものであり，現在の長野市全域が善光寺の門前町を起源とするものではない。そこでここでは，都市の成立起源と成長過程を考

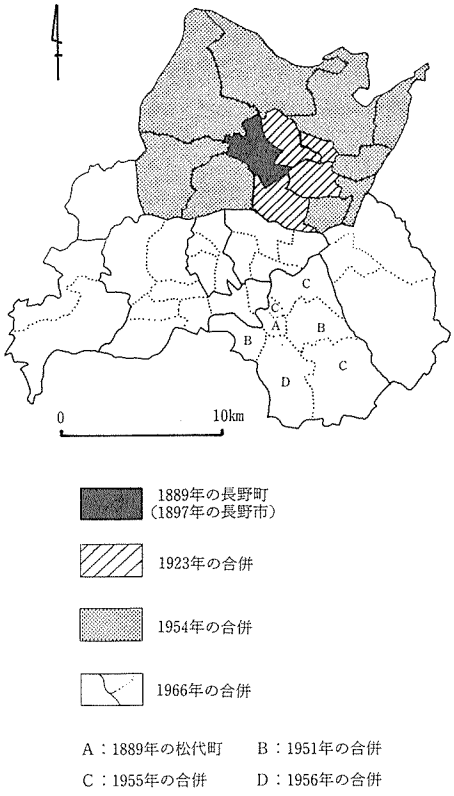
第1図　長野市の概要　20万分の1地勢図長野・高田より

えるために，日本の主要都市の起源となる10万石を越える石高を有する城下町であったのにもかかわらず，なぜ松代が都市域の中心としての役割を失ってしまったのか，そしてまた，松代に代わってなぜ門前町長野が急速な都市成長をみせたのかについて，明らかにしてみたい。なお以下では，1889年（明治22）の市町村制施行時における長野町の範囲を長野，松代町の範囲を松代，1966年の広域合併時点における範囲をそれぞれ旧長野市，旧松代町と称することにする。また，資料[2)]として主に「長野市の人口」，「長野県統計書」，「長野市史（1925年）」，「松代町史（1929年）」，「長野県町村誌（1936年）」を用いた。

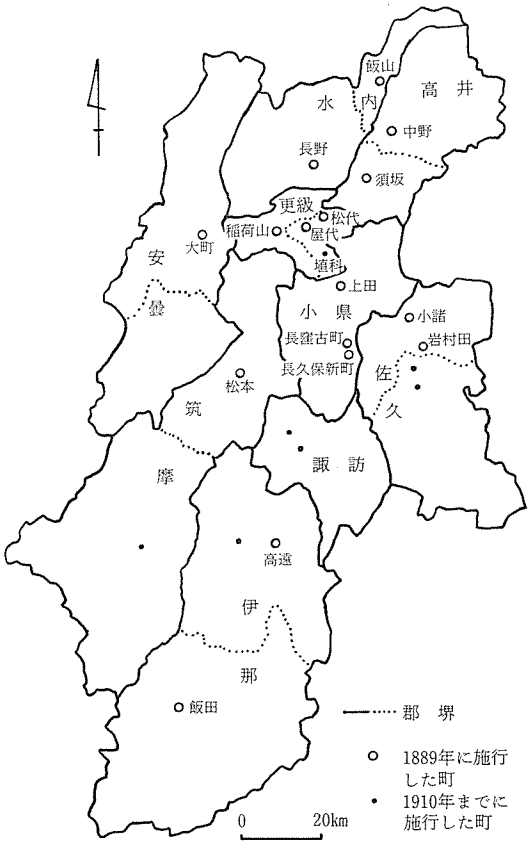
II　長野市域の拡大

1．1966年の広域合併

現在の新長野市が誕生したのは1966年10月16日のことである。この時，２市３町３村（当時の長野市，篠ノ井市，松代町，若穂町，川中島町，更北村，七二会村，信更村）が広域合併し，旧長野市の市制施行時に比べ面積が45倍に拡大した。この合併により，長野県において唯一の10万石の城下町であった松代の名称が市町村名から消えるとともに，松代は行政の中心としての機能も失ってしまった。新長野市の人口は271,528人（1966年５月１日現在）となり，旧長野市の人口（同，174,448人）に比べて約10万人の増加をみせた。長野市の人口はその後も増加を続け，30万人を突破したのは1974年（昭和49）のことである（第２図）。



第２図　長野市域の拡大



第３図　1889年における長野県内の町

２．旧長野市の誕生と市域の拡大

1889年の市町村制の施行時，長野県内には市が誕生しなかった。この時，町制を施行したのは，長野町，松代町をはじめとして，南・北佐久郡では岩村田町（現佐久市），小諸町（現小諸市），小県郡では上田町（現上田市），長久保新町・長窪古町（現長門町），上・下伊那郡では高遠町，飯田町（現飯田市），東・西筑摩郡では松本町（現松本市），南・北安曇郡では大町（現大町市），更級・埴科郡では稲荷山町・屋代町（現更埴市），上・下高井郡では須坂町（現須坂市），中野町（現中野市），下水内郡では飯山町（現飯山市）の16町であった（第３図）。これらのうち，市場町であった大町，稲荷山，宿場町であった長久保新町，

長窪古町以外は，いずれも近世に城下町または陣屋町であった。その後の明治年間においては，1893年（明治26）に南佐久郡の臼田町，諏訪郡の下諏訪町，上諏訪町（現諏訪市），西筑摩郡（現木曽郡）の福島町（現木曾福島町），1897年（明治30）に南佐久郡の野沢町（現佐久市），上伊那郡の伊那町（現伊那市），1904年（明治37）に埴科郡の坂城町が町制を施行している。明治年間に町制を施行したこれらの都市の多くで，現在市制を施行しているのが注目される。

この時，それまでの長野町，西長野町（1880年，腰村が改称），南長野町（1881年，妻科村が改称），七瀬以外の鶴賀町（1885年，鶴賀村が改称），茂菅村が合併して新しい長野町が誕生したのである。町制を施行した1889年における長野の面積は9.05km²，人口は24,529人[3]であった。1897年（明治30）には29,285人へと人口が増加し，長野県下ではじめて市制を施行することになった。1922年（大正12），長野と連坦する市街地化が進行しつつあった１町３ヶ村（吉田町，芹田村，古牧村，三輪村）を編入合併し，面積31.06km²，人口61,338人となった。善光寺本堂が国宝に指定された翌年の1954年（昭和29）には，千曲川以西，犀川以北の近郊10ヶ村を編入合併し，面積158.94km²，人口147,799人へと拡大した（第２図参照）。

３．旧松代町域の拡大

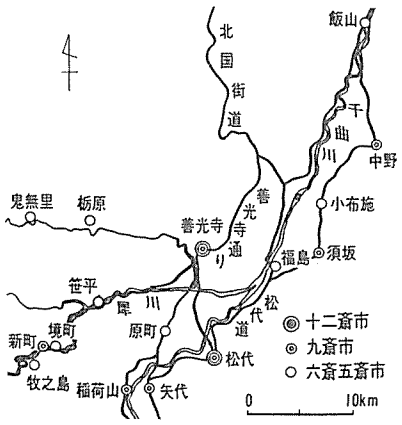
1889年，長野とならんで松代も町制を施行した。この時の面積は1.56km²であり，長野に比べてその面積が約６分の１と小さかった。当時の人口は不明であるが，1882年（明治15）では7,076人[4]，1900年（明治33）では8,041人と長野の４分の１程度であったから，当時は，松代の人口密度が長野より高かったことになる。1951年（昭和26）に近隣の清野村，東条村を合併して面積15.31km²，人口15,058人となり，1955年（昭和30）には３ヶ村（豊栄村，寺尾村，西寺尾村の一部）を合併して面積50.62km²，人口22,912人へ，1956年（昭和31）には西条村を合併して面積60.97km²，人口25,239人へと拡大した（第２図参照）。この時，松代を中心とした同心円上の位置にある，千曲川左岸の東福寺村や西寺尾村の全域などを合併していたとしたら人口も３万人を越え，松代市が誕生していたかもしれない。このことをふまえると，以下で述べる県庁の長野移転とともに，地理的慣性と歴史的偶然性というものについて考えさせられる。

III　都市の成立起源

１．近世までの長野（善光寺町）と松代

１）善光寺門前町の復活

1601年（慶長６），長野村が善光寺領と定まり，市街地を形成していた地域は，近世までは善光寺町と称された。善光寺町においては，中世までに僧侶，仏師・刀鍛冶などの職人，商人や遊女などの住む善光寺の門前町が形成されていた。戦国時代，善光寺平（長野盆地）は武田・上杉両氏の争奪の舞台となった。1555年（弘治元）の川中島の戦いの後，武田信玄により本尊の善光寺如来が甲府に移されると，それまでの善光寺町はほとんど壊滅することになった。武田氏滅亡の後，善光寺如来は岐阜，甚目寺（愛知県），浜松，甲府，京都と移されたが，42年後の1598年（慶長３）に豊臣秀吉により善光寺町に還座した。



第４図　近世の街道と定期市

1582年（天正10），川中島４郡を支配下においた上杉景勝は，宿駅制度を整備するとともに，北国街道（往還）の本街道を，それまでの長野を通る道（善光寺通り）から，川中島（善光寺平）支配の拠点海津城のある松代を通る道（松代道）に変更した。このため，宿駅としての善光寺町も衰退してしまった（第４図）。

この善光寺通りが本街道として復活したのは，1611年（慶長16），善光寺が北国街道の宿として定められてからである。その後，松代道に比べて距離の短い善光寺通りが主に用いられ，松代道は犀川の増水の際に利用される脇往還としての性格を強めることになった。こうして長野は，門前町とともに宿場町としても発展することになった。すなわち，近世初期における善光寺町の都市機能は，すでに善光寺の門前町としての機能のみではなく，宿場町としての機能も有していたのである。

２）川中島経営の拠点としての松代

松代（海津）城は，武田信玄によって築かれたのが最初である。信玄は，1553年（天文22）に北信濃から村上氏の勢力を排除すると，上杉謙信に対する拠点の地として松代を選び，1560年（永禄３），土塁からなる海津城を設けた。石垣や本丸・二の丸・三の丸を備えた城郭が完成したのは，田丸直昌や森忠政が入城してからであり，この城郭を中心とした松代城下町が整備されたのは，真田氏が1622年（元和８）に上田から松代に入封してからである。松代城下町はその後，明治にいたるまで松代藩領内のみならず北信地方（長野盆地を中心とする長野県北部地域）の政治，文化，経済の中心として発展することになった。

３）近世における善光寺平の市

1601年（慶長６），徳川家康により善光寺に1000石の寺領が寄進された。この頃，善光寺平には多くの市が開かれていた（第４図参照）が，十二斎市が開かれ，この地域に開かれていた市の中心となっていたのが善光寺町（長野）と松代城下町であった。このうち中世から栄えていた善光寺町の市は松代城下町より有力であり，近世後期まで，善光寺領のまわりにひろがる松代藩領222村中103村が善光寺の市を利用していたという[5]。

善光寺町では一，四，六，九の日に市が立てられ，そのうち四，九の日は大市であった。初期の頃の市は，どこへ店をだしてもよい楽市であった。1680年（延宝８），善光寺門前の大門町は伝馬役を負担するかわりに一，四の市を独占する許可を得た。この独占した市は路上で商品を並べて売買する筵市であり，常設店舗での商いは自由であった。しかしながら，常設店が未発達であったため[6]，その後近世を通じて市の中心は大門町となった（第６図参照）。

このように，近世の善光寺町においては，善光寺の門前町，北国街道の宿場町としての機能の他に，松代城下と並んで，周辺地域の商業の中心という機能が備っていたのである。

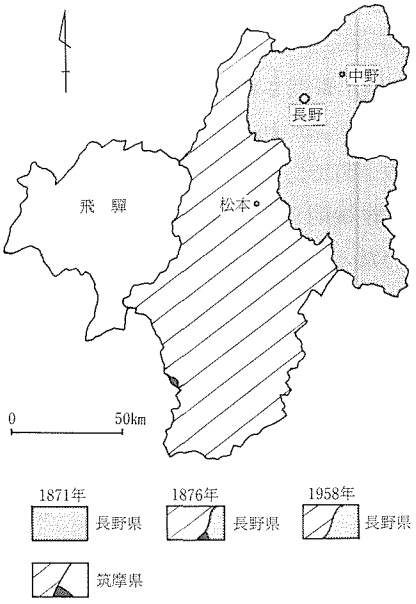
２．近代における長野と松代

1）長野県の成立と長野・松代

長野の都市起源は，門前町，宿場町そして市場町としての機能をあわせもっていた近世における善光寺町にあるが，今日の長野の発展があるのは，1871年（明治４）に行政の中心としての機能が付加されたためである。

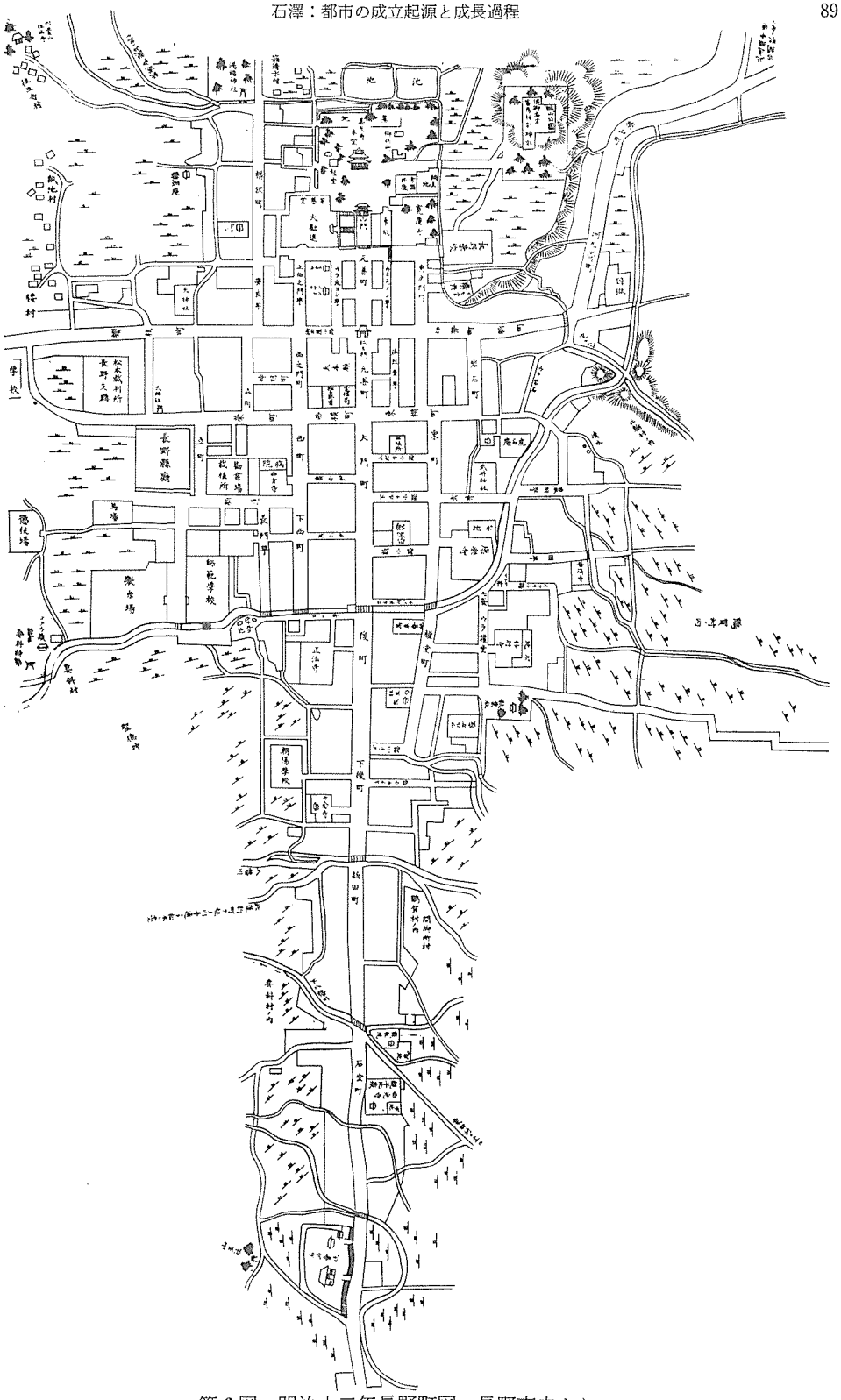
1869年（明治２），現在の長野県内に所在していた旧幕府領や預り地，代官支配地などを管轄するために現在の飯島町に伊那県がおかれた。翌1870年（明治３），新たに中野県をおき，伊那県のうち現在の長野県北部地域を管轄することになった。中野県の庁舎は，現在の中野市にあった旧中野代官所陣屋におかれた。同年12月，松代，須坂騒動に続いて中野騒動がおき，県庁が焼失したため，法運寺に仮庁舎が設けられることになった。善光寺領は1870年に松代藩領に組込まれるが，翌年２月に中野県に編入され，３月には中野県の出張所が設置されることになった。６月になると，当時の中野村の反対をおしきって県庁が，善光寺の門前町であり北国街道の宿場町そして市場町として栄えていた長野に移された。県の名称も長野県と改められ，仮庁舎として西町の西方寺が利用された。これを契機として長野は，門前町，宿場町や市場町などの文化・経済的機能だけではなく行政面においても，旧幕府領を主とする地域の中心としての機能を備えることになったのである。７月の廃藩置県によって，松代藩をはじめとする藩が廃止され県が設置された。11月には，北信地方と東信地方（上田市，小諸市，佐久市などを中心とする長野県東部地域）の旧藩領が長野県に編入され（以下これを旧長野県と称する），長野は現在の長野県北部地域における行政の中心機能を有することとなった（第５図）。この時に，門前町長野の発展と，10万石の城下町松代の衰退が約束されたといえよう。

1876年（明治９），松本におかれていた南信・中信地方（長野県南部地域）と現岐阜県飛騨地方を管轄する筑摩県の庁舎が全焼し，仮庁舎が開智学校に設けられた。このころ府県の統合と再編成が行なわれており，火災の前にも旧長野県，筑摩県，山梨県を統合するというわさがあった。このうわさが現実のものとなったのは1876年のことである。この時，筑摩県の新庁舎が再建されることなしに，飛騨地方を除く筑摩県は旧長野県に統合され，長野は行政的な中心機能をより充実することとなった。



第５図　長野県域の変遷

以上の経過を経て，信濃の国とよばれた地域が一つの県としてまとまったのである。このことが，後に何度か繰返される県庁の移庁・分県問題の原因であり，県内の施設などの配置にあたっては，つねに長野を中心とする東北信と，松本を中心とする中南信という，地域間のバランスが配慮されることになった。



第６図　明治十二年長野町図　長野市史より

2）長野における都市機能の充実

県庁の長野移転にともなって，善光寺周辺には種々の行政機関が設けられた（第6図）。まず淀が橋に囚獄（現長野刑務所）がおかれ，1886年（明治19）に現在の合同庁舎の場所に移転し監獄となった。1876年（明治9）に大勧進内におかれた長野区裁判所（現在の長野地方裁判所）は，名称を変えながら1878年（明治11）に立町に移転し，1886年には花咲町に移転した。1879年（明治12）には上水内郡の郡役所が立町におかれ，1902年（明治35）に縣町に移転した。町制施行時の1889年に現在の城山小学校（当時は長野学校と称していた）の場所におかれた長野町役場は，市制を施行した翌年，若松町へ移転し，広域合併前年の1965年（昭和40）に現在の場所に移転している。また，西方寺におかれた長野県庁は1874年（明治7），その西にある現在の信州大学教育学部の場所の新庁舎に移転し，1913年（大正2）に現在位置に移転している。現在の建物になったのは1967年（昭和42）のことである。

3）長野県の成立と松代

近世には松代藩10万石の所在地として，北信地方の政治・文化・経済の中心地として栄えていた松代は，長野県に統合されると，その中心的機能を急速に失った。このことは，1878年（明治11）に松代におかれた警察署が，本署ではなく長野警察署の分署であったことにも象徴される。1878年における郡区町村編成法の成立と1879年（明治12）における大区・小区制の廃止により，松代町は埴科郡唯一の町となった。しかしながら，埴科郡役所が松代町ではなく屋代村（現更埴市屋代）におかれたため，郡域における政治の中心としての機能も失うことになった。

当時の屋代村（1872年に矢代から改称）は1870年（明治3）まで本陣がおかれ，北国街道の宿駅としての機能を有していたが，人口が2,429人と松代の約3分の1にすぎなかった。ここに郡役所がおかれることにより，それに付随する行政機関が設置された。すなわち1879年の上田警察署屋代分署（1886年本署に昇格），1889年の上田治安裁判所屋代出張所，1906年（明治39）の税務署などである。こうして，屋代村が松代町に代って，埴科郡の政治の中心として発展することになった。明治初期から明治中期（1882年）までの人口を比較すると，松代町が約1,300人と大幅に減少したのに対して，屋代村では約100人の増加を示している。さらに1889年には粟佐と合併することにより，松代とならんで町制を施行するまでに発展している。

経済機能としては，上田に国立第十九銀行がおかれた翌年の1878年，松代に国立第六十三銀行本店が設置され，翌1879年長野に国立第六十三銀行支店が設けられた。すなわち，金融機能においては当時は長野より松代が上位だったのである。この国立第六十三銀行は，経営上の問題から1893年（明治26）稲荷山銀行と合併し，本店が稲荷山に移転してしまった。第六十三国立銀行は1897年（明治30）私立銀行となったが，1922年（大正11）には本店を長野に移転している。このように経済の中心も，松代から長野に移動してしまった。

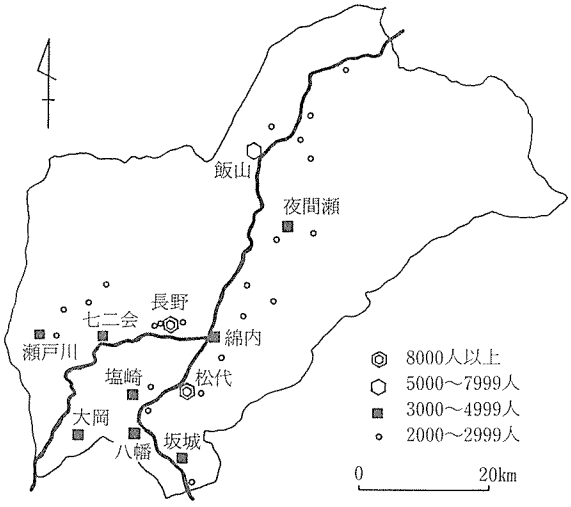
Ⅳ　都市の成長過程

1．長野市街地の成長と松代市街地の停滞

1）近世末期における長野の構造

近世末期における正確な資料はないが，松代城下町には約1万人弱が居住していたと推定されている。また長野市史には，1858年（安政5）における善光寺領の人口は7,780人と記載されているから，長野より松代のほうがやや多いものの，ほぼ同規模の人口を有していたと考えられる。

明治初期における北信地方の都市集落の分布を示したのが第7図である。なお，これらは1879年の大区・小区制の廃止により復活した町村（基本的には藩政村であるが，明治初期に一部合併したものもみられる）である。山間地域では村の規模が大きく，夜間瀬村，七二会村，大岡村，瀬戸川村など3,000人をこえるところもみられるが，このような山間地域を除くと，3,000人台の人口を有するものとしては綿内村，塩崎村，八幡村，坂城村があげられ



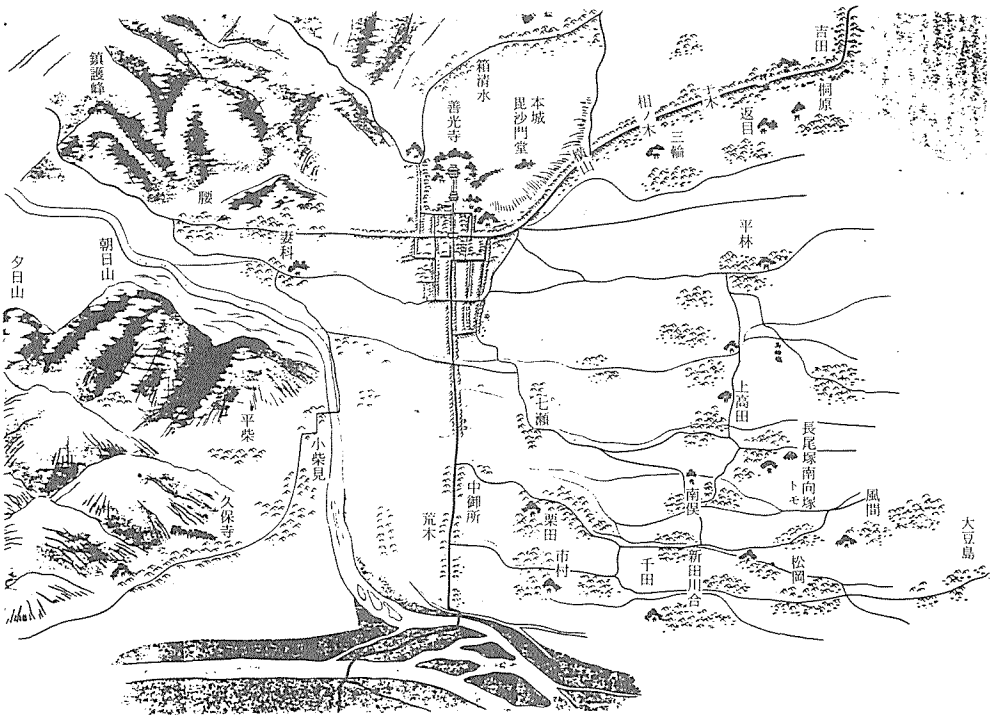
第7図　明治初期における集落の分布

るのみであり，北部における飯山町（5,876人）と，南部における長野町（8,073人）[7]および松代町（8,415人）が他を大きく引き離していたことがわかる。

この時期の長野市街地を，安政四年実測図（第8図）や明治十二年長野町図（第6図）により確認すると，長野市街地は善光寺周辺および北国街道に沿って広がっている。善光寺と後町との間は集村状をなしているが，東側では岩石町，東町，権堂町までであり，武井神社や秋葉神社以東は農地が広がっていた。また西側では西之門町，西町までであり，長野県庁（現信州大学教育学部）や師範学校（現市立図書館）以西は農地が広がっていた。後町以南は北国街道に沿った街村状の市街地が西光寺近くの石堂町まで続いているのみであり，全体として現在よりもはるかに規模の小さい市街地であった。

2）近世における城下町松代の構造

松代城下は武家屋敷と町屋敷から構成されていた。近世末期における城下の人口を推定する資料として，武家屋敷に関して「松代藩士族卒給録適宜現石調（1871年）」，町屋敷に関して「御町八町中男女人別相改（1767年）」，寺社や武家屋敷の長屋に居住する者に関して「御

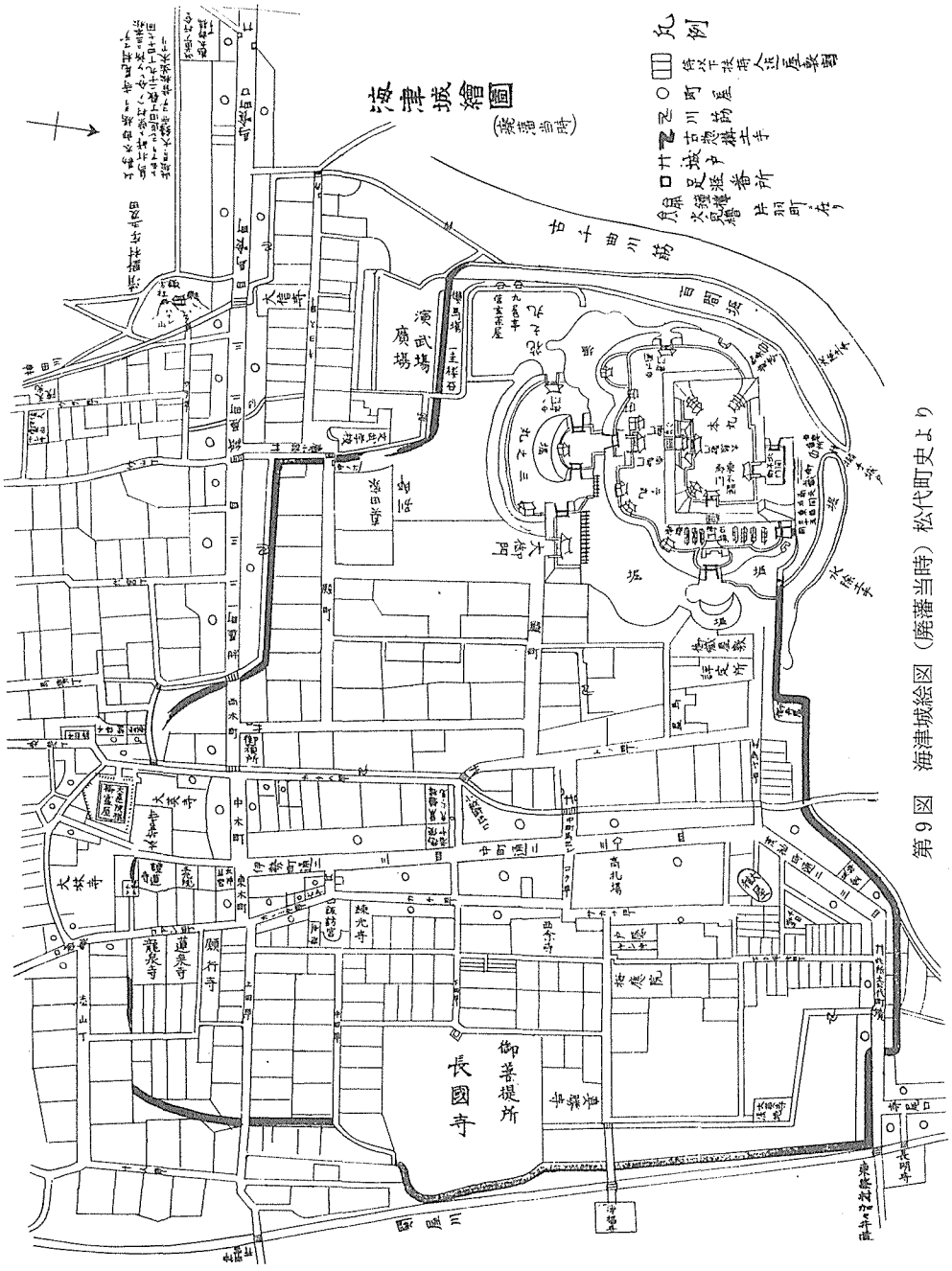


第８図　安政四年実測図　長野市史より

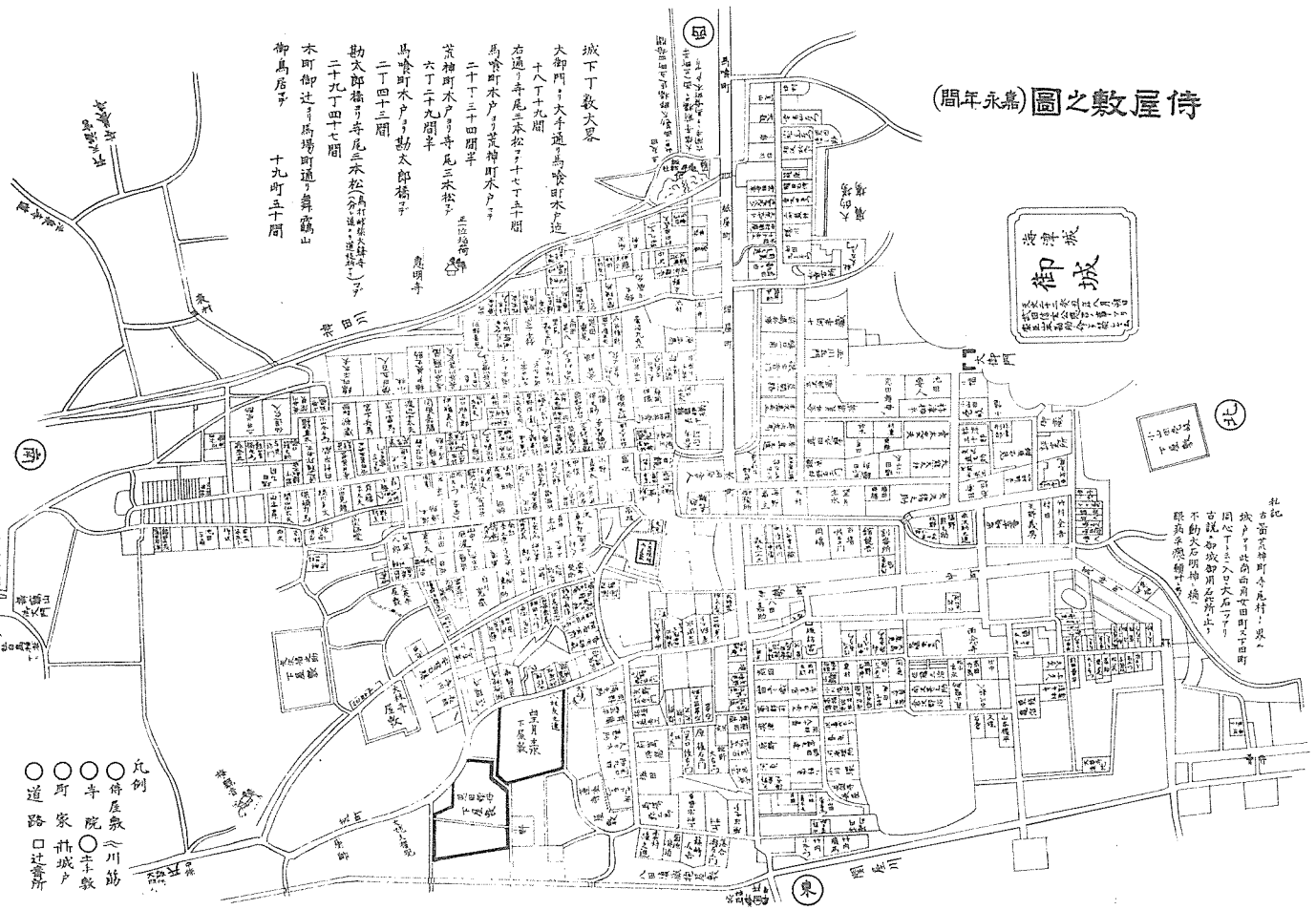
家中長屋人別町（1864年）」があるが，それらによると，徒士以上の家臣数は879人，町人は2,319人，長屋居住者は2,710人となっている。家臣の家族を含めると武家屋敷には4,000人強の人口があったと推定される[8]から，幕末から明治初期における松代の人口は5,029人に4,000人を合せて１万人弱の人口があったと考えられる。

この松代城下の構造を，海津城絵図（第９図）や侍屋敷の図（第10図）により確認すると，すでに現在とほぼ同規模の市街地を形成していたことがわかる。松代城下は，本丸・二の丸・三の丸からなる松代城の周囲に上級武士団の屋敷町（殿町，清須町）が配され，それを中級武士団の屋敷町，さらにその外側や城下町の入口に下級武士団の屋敷と寺町が配置されていた。また，東側では関屋川に沿った荒神町から長国寺まで，南側では龍泉寺，大英寺から殿町を囲むように，土塁と一部は堀割が築かれていた。正蓮寺と大林寺の間に土塁の一部が残っているが，この外郭が，龍泉寺，大英寺，大林寺などが配置された寺町のある南東方向へせりだしているのは，築城当時の主要な街道が，北東の大室から松代を経て南東の地蔵峠へ通っていたためである[9]。

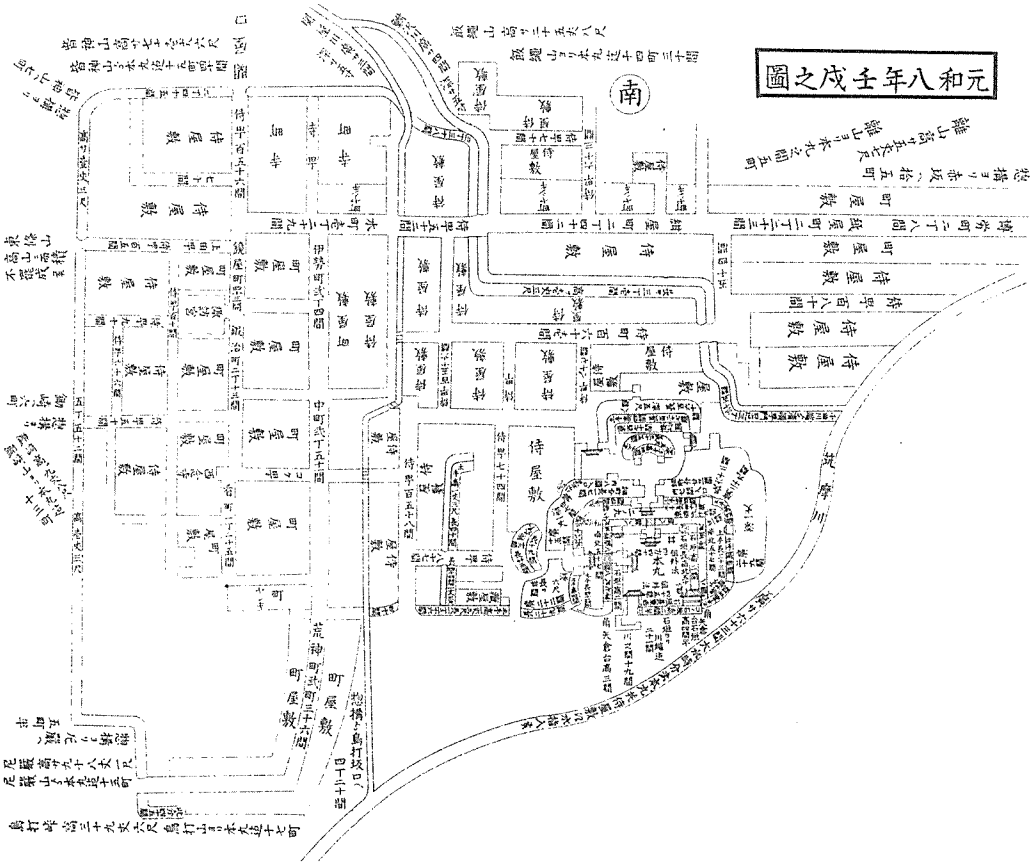
城下町の中心部を，北国街道が西方の清野村から北方の東寺尾村へ鉤の手に貫いており，これに沿って町人町である街八町（西から馬喰町，紙屋町，紺屋町，伊勢町，中町，荒神町，東裏通りに肴町，鍛治町）が配されている。このうち，上三町（馬喰町，紙屋町，紺屋町）以外は，前述した土塁の内側に町建てされていた。これは，本町三町（伊勢町，中町，荒神町）と脇二町（肴町，鍛治町）が，築城時に町建てされたことによるためである。なお，殿町と町人町との間にも現在小鮒川となっている堀割が設けられていた。西と南を外郭の堀割，



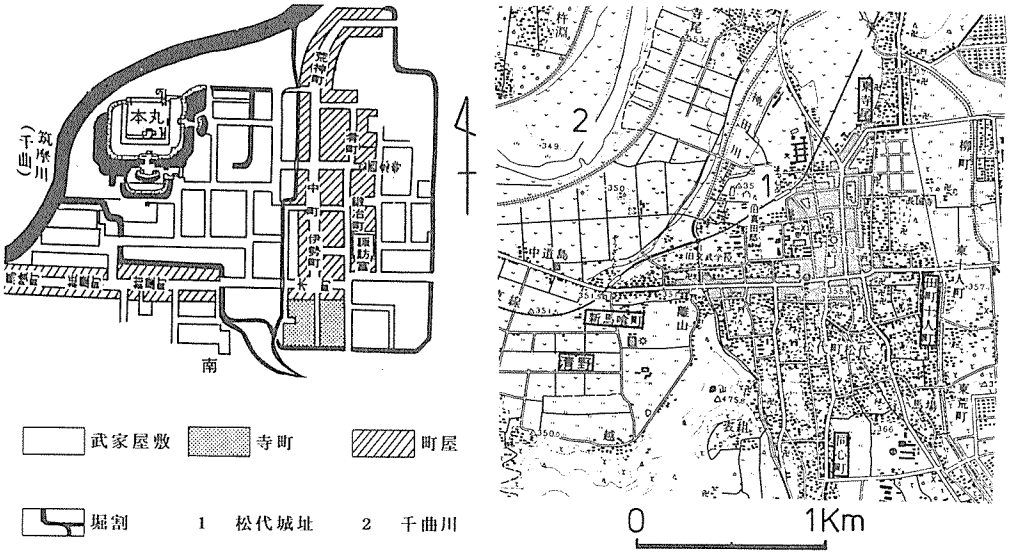
第9図　海津城絵図（廃藩当時）松代町史より



第10図　侍屋敷の図（嘉永年間）松代町史より



第11図　元和八年壬戌之図　松代町史より



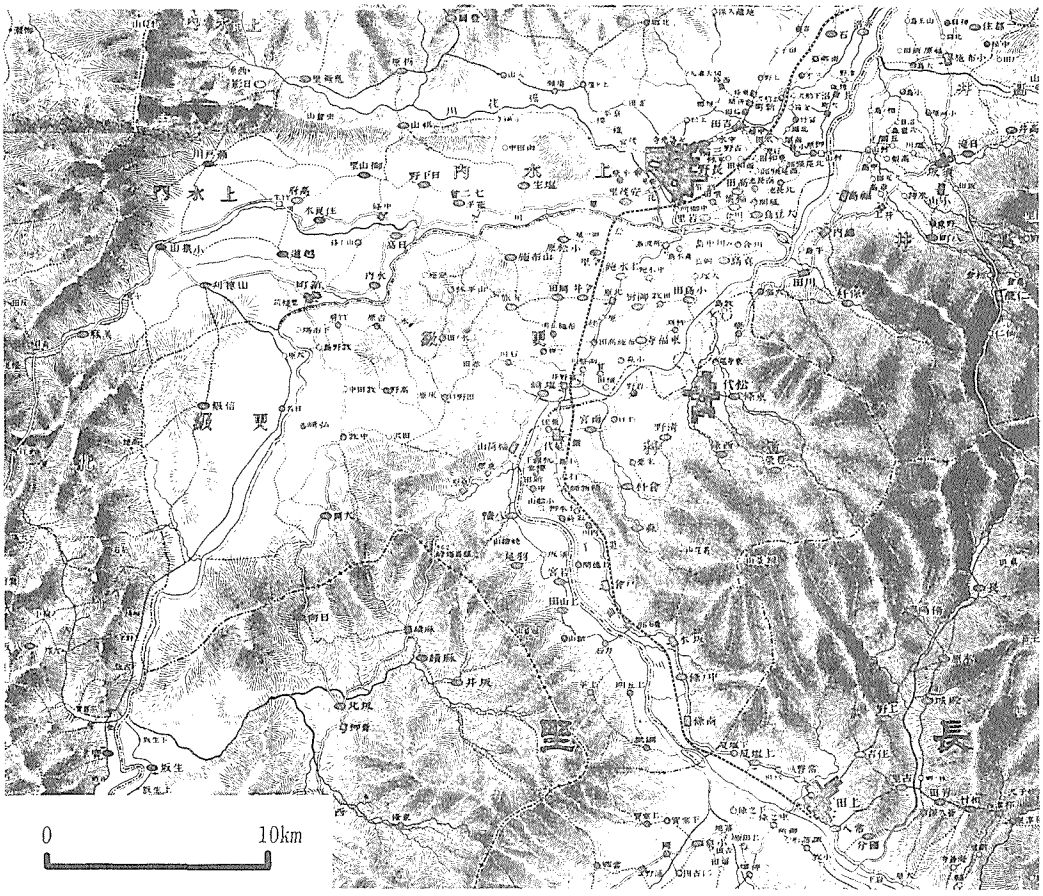
第12図　藩政期における松代城下の構造と現在の松代

東を小鮒川で囲まれ南につきだしている武家屋敷の場所に現在の松代支所が位置している（第11図）。

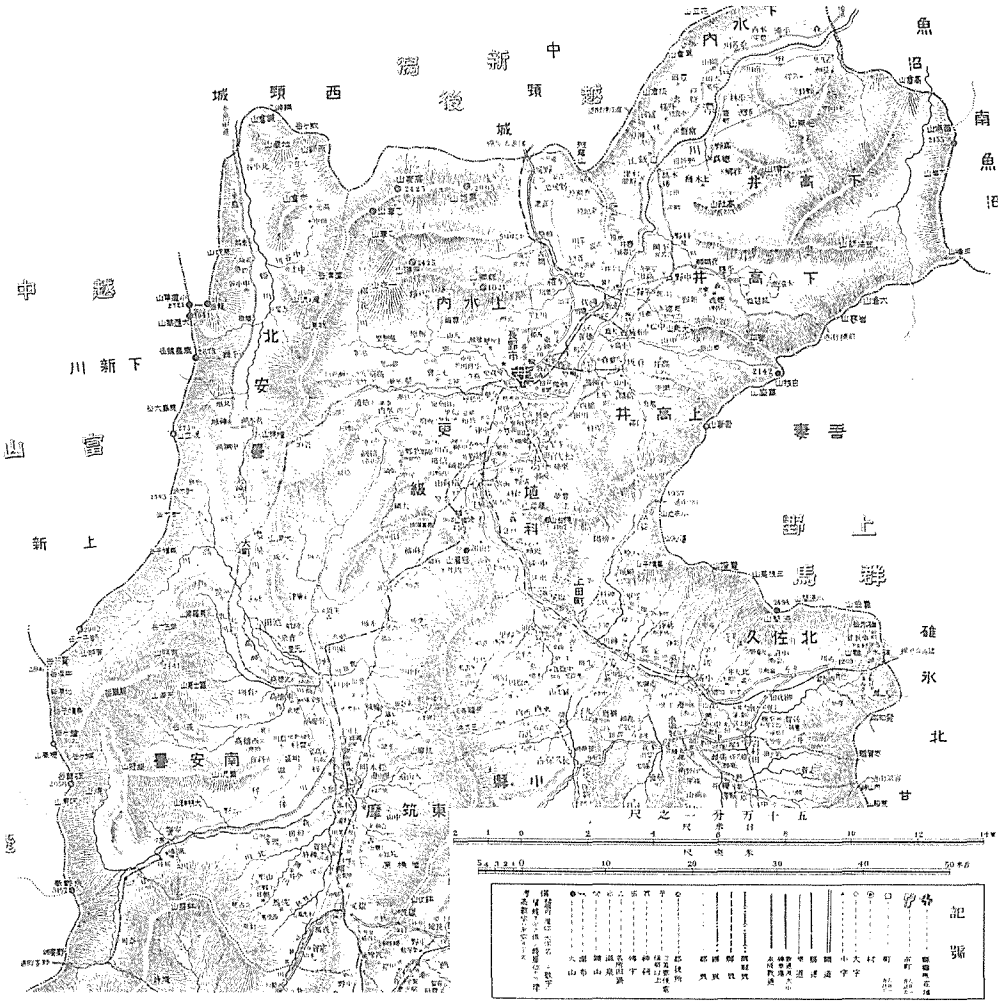
このように，築城時の松代城下は，千曲川（河川改修により現在は神田川がその旧流路を流れている）の東南に広がる半同心円的な形状をなし，郭内に町人町をとりこんだという，惣構えの特異な構造であった。なお，上三町は近世初期になってから町建てされている。この町人町を含めた城下町の構造は，現在の松代においても基本的には変化がないといってよい（第12図）。

3）明治期における長野と松代

1889年の町村政施行時，長野は実質的に市街地が拡大しつつあった鶴賀町の一部，南長野町，西長野町および茂菅村を合併した。これにより，長野と松代の人口には大きな格差が生じることになった。1888年（明治21），信越本線長野一直江津間の開通により長野駅が開業すると，松代に比べて長野の交通的重要性はますます高まることになった。これに対して松代では，士族授産事業としての六工社をはじめとする製糸工業を誘致し，工業化により町の振興をはかろうとしたが，それでも長野との人口差は拡大していった。1900年（明治33）に



第13図　輯製二十万分の一図より



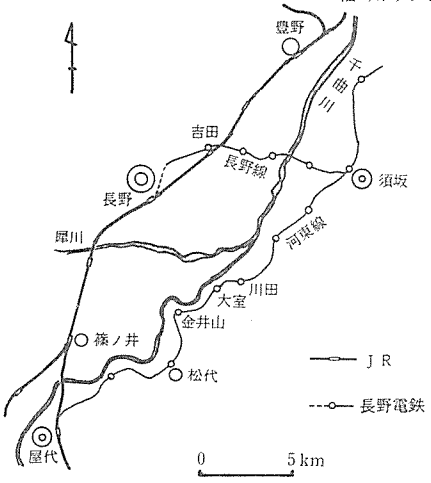
第14図　信濃国全図（一部抜粋）

は長野が32,402人，松代が8,041人と４倍の開きが生じている。

とはいうものの，輯製二十万分の一図・長野（1887年）には長野，上田とならんで松代が，人口１万人以上の市街として記載されている（第13図）。また，長野県第二十統計書（1902年）の信濃国全図にも人口１万人以上の市町として，長野市，松本町，上田町，飯田町とならんで松代町が記載されている（第14図）。このように，長野との格差が広がりつつあったとはいうものの，当時の松代は，長野県内の重要な都市の一つとして位置付けられていたといえる。

４）大正期における長野と松代

信越本線は当初，新井―飯山―須坂―松代―屋代を通るルートが計画されていた。これが長野を通るルートに変更されたことに対し，松代では新たな鉄道の誘致運動をおこしている。この運動が実現するのは約30年後の1922年（大正11）のことであり，屋代―松代―須坂を結ぶ河東鉄道が開通し，ようやく松代に鉄道が通ったのである（第15図）。しかしこの時には，



第15図　長野周辺における鉄道交通網

すでに長野盆地における交通の中心は長野に移ってしまっていた。1920年（大正９）における人口は，長野の37,308人に対して松代は8,178人であり，その格差は4.6倍に広がった。とはいうものの，20年間で0.6倍広がっただけであり，この期間においてはそれほど人口の格差が広がったわけではなかったものといえる。

市街地についてみると，大正１年測量の五万分の一地形図には，町制施行時の範囲にとどまってはいるものの，長野市街地が拡大していることが認められる（第16図）。特に，県庁の移転した南長野と，後町から長野駅の間が市街化されたことが目につく。これに対して松代では，近世末期の市街地とほとんど変化がみられない（第17図）。このように，松代市街地が停滞しているのに対して長野市街地が拡大し，長野と松代の人口格差も次第に拡大することとなった。

５）近年の長野と松代

経済の高度成長期に相当する1970年の人口は，長野が57,178人[10]松代が7,308人であり，その差が約８倍と広がった。その後，人口格差は次第に縮小しており，1990年では約７倍[11]となっている。これは長野周辺地域で人口のドーナツ化現象が進行しているためである。

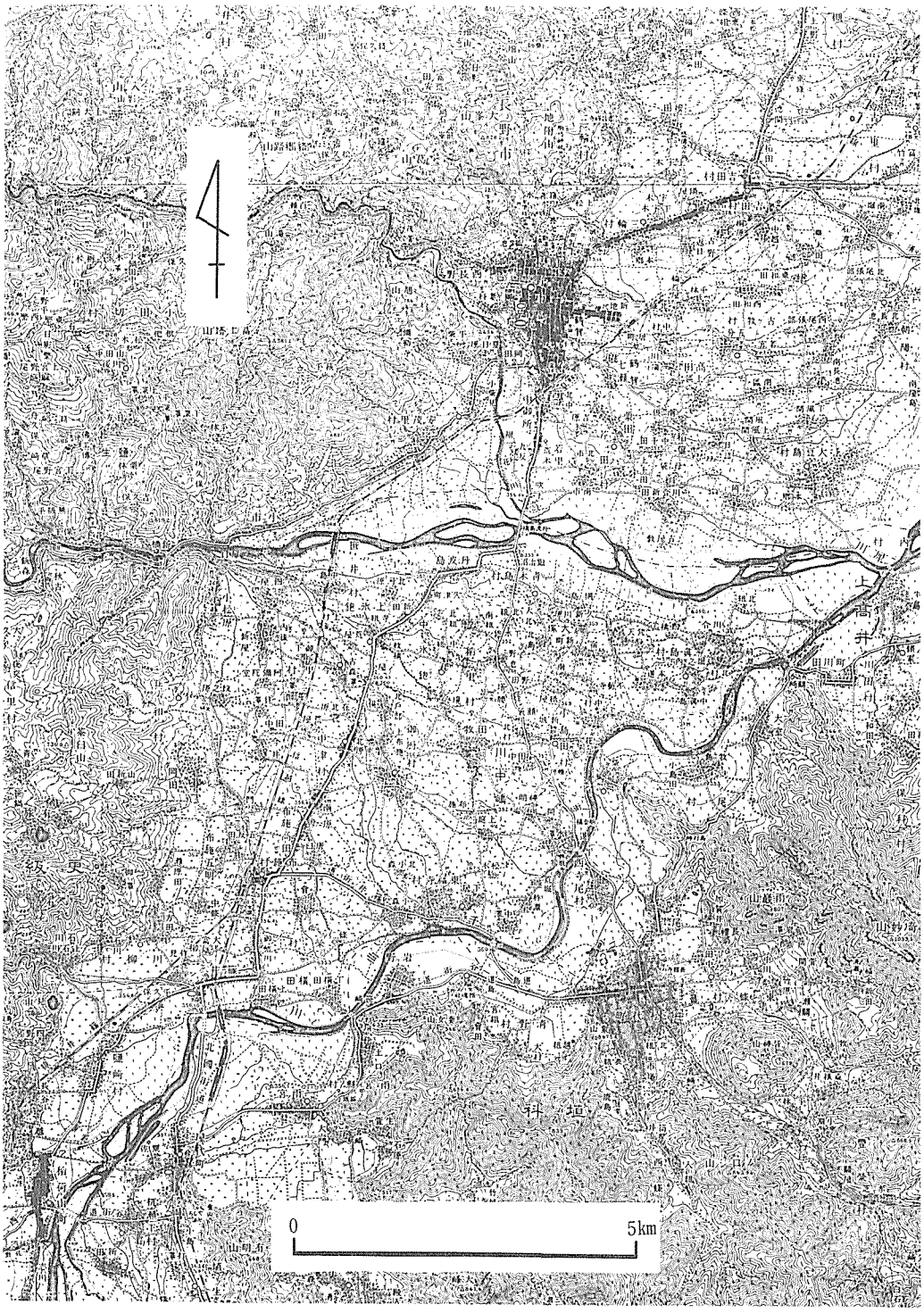
実質的な市街地であるDIDを1990年国勢調査によって確認すると，長野では，市街地が長野の範囲を越えて拡大し，北は浅川や若槻，東は古里や柳原，東南は長野バイパスに沿った芹田，南は犀川を越えて川中島町丹波島など，旧長野市の平野部のほとんどが市街地になっている（第18図）。これに対して松代では，東条への一部の拡大はあるが，近世末期の市街地の広がりからほとんど変化がみられない。

換言すると，こと市街地に限れば，松代が衰退したのではなく，松代は近世末期からほぼ同規模の市街地を維持しているのであり，長野の市街地が急速に拡大した（第19図）ので相対的に松代が衰退しているかのようにみえる，といったほうがよさそうである。

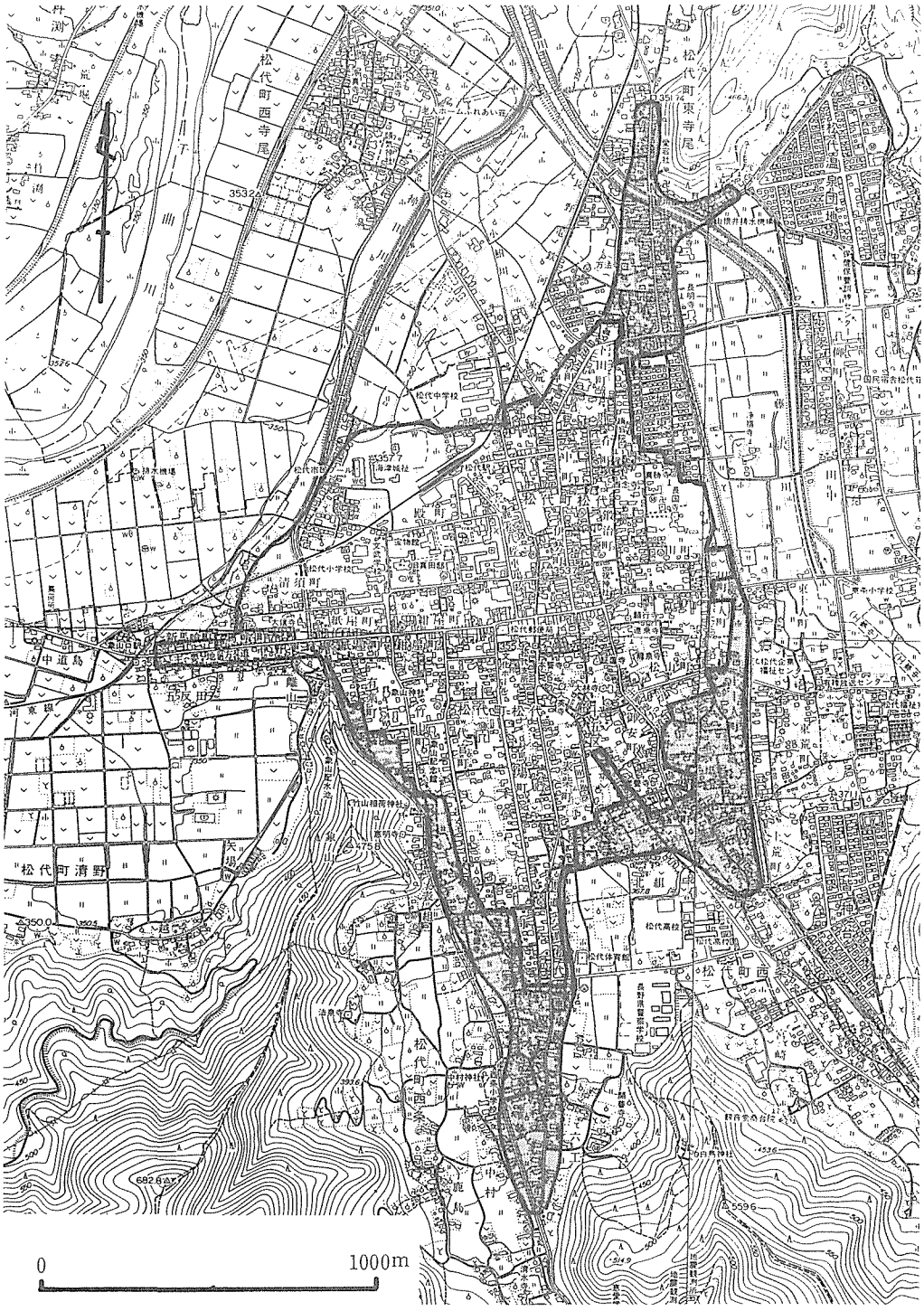
２．長野と松代における人口の推移

明治期以降の長野と松代の人口の推移を検討するための資料として，「国勢調査」，「長野県統計書」などがある。なお，第１回国勢調査が実施されたのは1920年（大正９）のことである。このため，それ以前の資料として「長野県市町村誌」，「長野県統計書」を主に用いることにした。なお，1920年における「国勢調査」と「長野県統計書」の人口数には差異が認められる[12]。このような資料上の制約から，1915年以前と1920年以降に分けて検討を加えることにした。また，1925年（大正14）から1965年（昭和40）までの長野の人口は，1922年に合併した芹田，古牧，三輪，吉田と合算されて記載されている。このため，本節ではこの範囲を旧長野市と称し，主に旧長野市と松代との人口推移を検討した。

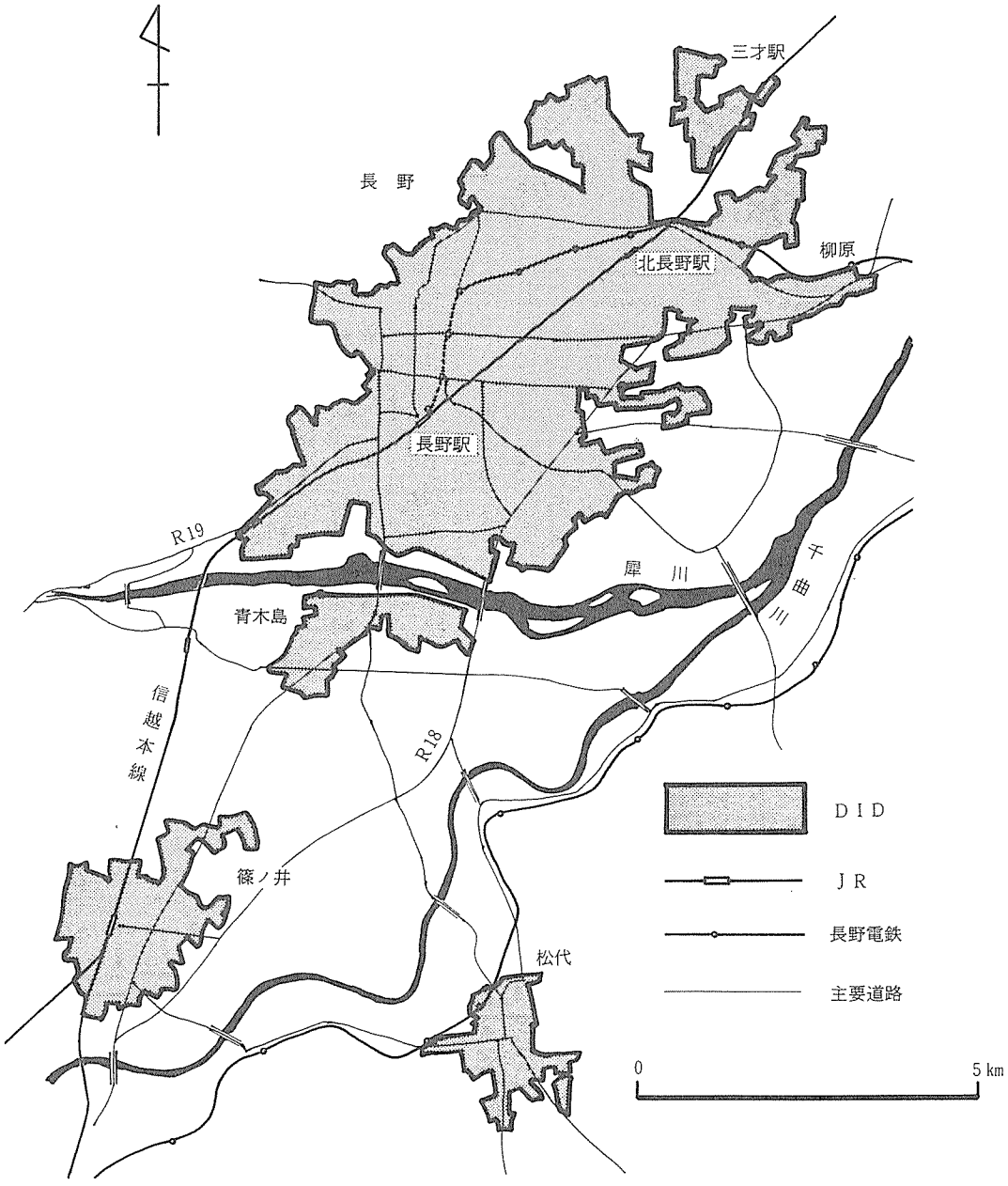
1915年以前においては，第20図に示されるように長野の急激な人口増加が注目される。明



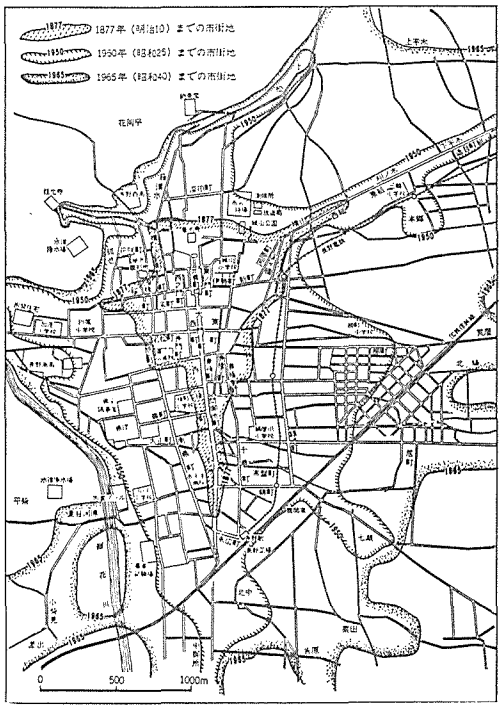
第16図　五万分の一地形図　大正元年測量長野・戸隠より



第17図　松代市街地の拡大　網掛は明治期における拡大部分

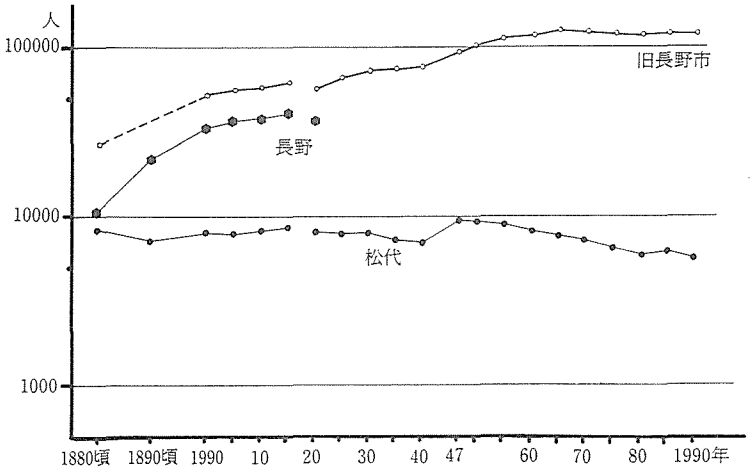


第18図　長野市におけるDID（1990年）



第19図　長野市街地の拡大　小林（1985）

治期の約30年間で，長野の人口は約３倍に増加した。1920年以降は長野の数値がないので，旧長野市の推移をみると，第二次世界大戦の一時期（1940年）を除いて高度経済成長期まで一貫して人口の増加を示し，1965年には1920年の２倍となった。なお，1970年以降の旧長野市の人口は減少に転じているが，これは都心部における人口のドーナツ化現象が生じているためである。



第20図　長野と松代における人口の変化

これに対して松代では，明治初期から1900年にかけて人口が減少した。これは，他の城下町にもみられるように，明治初期の廃藩置県の混乱にともなう士族の流出によるところが大きいのであろう。明治後期になってようやく松代の人口は増加に転じ，1910年になって明治初期の人口を回復した。これは製糸工業を中心とする，工業化による人口の増加と考えられる。1920年以降の変化をみると，第二次世界大戦の前後を除き，松代の人口は徐々に減少する傾向をみせ，1970年以降は長野と同様の推移をみせている。なお，1940年から1947年にかけて急激な人口増加を示しているが，これは第二次世界大戦末期における松代大本営工事にともなう軍人や建設労働者の流入によるものであろう。つまり，この一時的な人口の増加は，軍事的（当時は行政も兼ねあわせた）中枢管理機能が松代に移転したことによるものであったといえる。

3．都市の成長要因

明治期以降の長野と松代における人口の変化をみると，長野の人口が急増しているのに比べて，松代の人口は，やや増減はあるものの，ほとんど変化がみられないといってよい。特に明治期においては，長野の人口が3倍に急増しているのに対して松代の人口が減少をみせた。ここから考えると，都市の成長要因としては，以下に述べるように，政治（行政）的な中心機能が最も重要であるといえる。

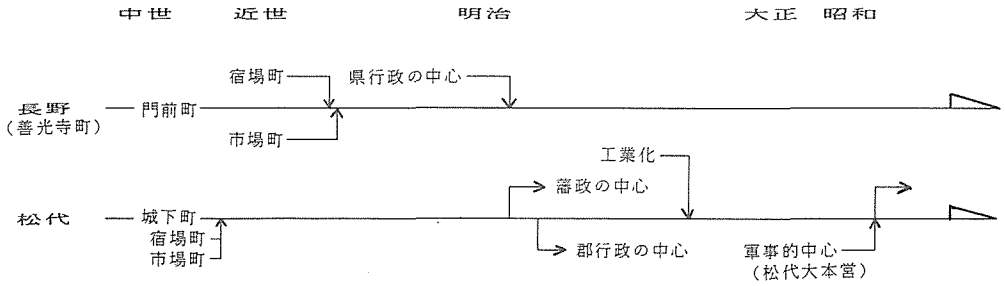
明治初期，それまでの松代藩という政治の中心機能を失った松代では，1876年（8,415人）から1882年（7,076人）までの6年間で1,339人，15.9％の人口減少を示している。これに対して長野県の政治の中心となった長野では，1877年頃（14,013人）から1886年（18,564人）にかけての10年弱で，4,551人，32.5％の人口増加を示した。工業化を振興した松代の人口が1882年（7,076人）から1915年（8,971人）までの33年間でようやく26.8％の増加にとどまっているのと比較しても，政治機能の付加にともなう人口の集積効果の大きさに驚かされる。

特に経済の高度成長期において，地域の発展のためには工場を誘致して工業化を振興することが重要であるとされてきた。確かに新産業都市の多くは人口が増加しているが，県庁所在都市クラスなど行政的中枢管理機能が集積していた都市以外で，人口が30万人を越える都市は稀である。すなわち，工業化のみでは都市成長に一定の限界がみられるのである。

我が国では，企業の活動に対して多くの行政的制約がある[13]。このため，行政による許認可などを必要とする企業は，当該役所に近接して立地する方が活動に有利となる。企業が集積することによって雇用労働力が大きくなり人口も集積する。人口が集積すると，商業・サービス業などの第三次産業も集積することになる。これにより，さらに人口が集積するのである。すなわち企業そしてまた人口の集積効果は，工業化によるよりも，行政的中枢管理機能によるほうがはるかに大きいのである。長野が急激に成長したのも，松代が工業化により町の振興をはかろうとしても長野との格差が広がったのも，このことに照らし合せるとよく理解ができるであろう（第21図）。

4．長野市の中心長野における都市構造の変化

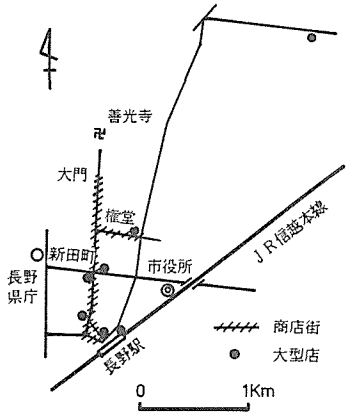
現在の長野市は，1966年に2市3町3村を廃し，これらが広域合併して成立した新長野市であるが，行政・経済その他の諸機能においても長野が他地区を圧倒的に凌駕している。こ



第21図　長野と松代の成長過程

こでは，長野の急激な成長にともなって，長野の都市構造がどのように変化してきたかについて述べてみたい。

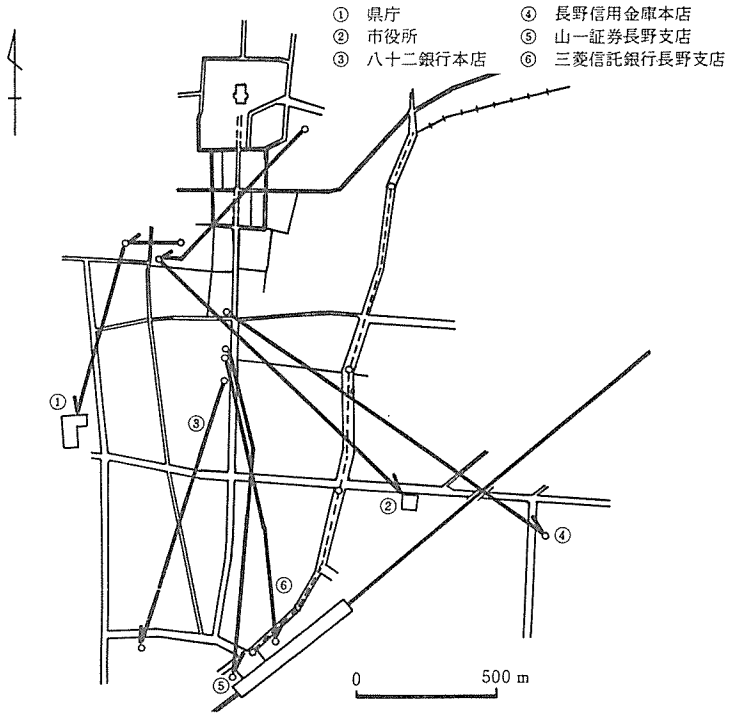
近世の長野においては前述のように，善光寺宿の本陣が設けられ，また，十二斎市のうち一と四の市を独占していた大門町が，交通の要衝としてまた商業の中心として栄えていた。1888年（明治21）に信越本線長野駅が当時の市街地の南郊に開業すると，大門町の旅館や商店が駅前に支店を設けたため長野駅前にも市街地が形成され，1924年（大正13）には長野駅から大門町までの中央通りの拡幅工事が完成した。また1926年（大正15）に長野電鉄線の須坂駅―権堂駅間が開通し，権堂駅が河東地域（善光寺平における千曲川の右岸地域）をはじめとする長野電鉄沿線地域からの玄関口となると，長野における商業の中心はそれまでの大門町から，権堂町および，中央通りと相生通りの交差する後町へと移動することになった。さらに1967年（昭和42）からはじまった土地区画整理事業にともなって長野駅前に大型店（大規模小売店舗）が開業することにより，長野における商業の中心はそれまでの後町・権堂町から長野銀座（新田町）へ，そして長野駅前へと次第に南へ移動しつつある。このような長野における商業の中心の移動の結果，善光寺門前の大門町から長野駅前まで約2km の連続する商店街が形成されることになった。しかし，実質的には，それぞれに大型店の立地する権堂地区，長野銀座地区，長野駅前地区の３つに分れており，それらがうまく機能的に結合していないところに，長野における小売業の問題点があるといえる[14]（第22図）。



第22図　長野における大型店の配置
（売場面積5,000m²以上）
石澤（1990）

明治初期に県庁や市役所がおかれて以来，長野における行政の中心は大門町の西側にあった。1913年に県庁が現在の位置に移転し，1965年には市役所も若松町から現在の緑町に移転することとなった。長野刑務所跡地に国の合同庁舎が建てられたとはいうものの，行政の中心も大門町付近から南に移動することとなった。

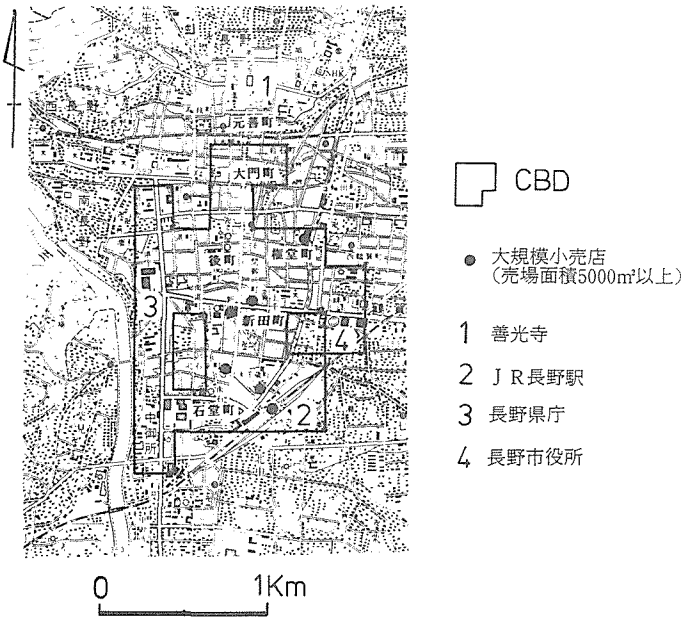
地方都市の都心においては，小売業をはじめとする商業機能や行政機能が重要な機能となっている。長野においても，行政機関の移転や商業の中心の移動[15]に



第23図　長野における主要施設の移動

ともなって，善光寺付近の大門町から長野駅近隣地域への移転する他の経済機能がみられる（第23図）。この傾向は特に金融機関について強い。1969年（昭和44）に八十二銀行本店が後町から長野駅西方の岡田町に新築移転し，1978年（昭和53）には長野信用組合本店が善光寺の門前大門町から市役所東方のあづま通りに面した居町へ移転している。1985年以降も山一證券長野支店が後町からＪＲ長野支社ビルへ，三菱信託銀行長野支店が長野大通りに沿った長野駅近くの南千歳町へ移転した。また，長野駅近隣地域では国際証券や三洋証券などが新たに開業している。この結果，かつては大門町から後町にかけての地域と，中央通りと昭和通り（国道19号線）とが交わる長野銀座付近に金融機関が集積していたが，現在は長野駅近隣地域が前者にとって代わりつつある。さらに，1981年（昭和56）における長野電鉄線の地下鉄化[16]により，東西の市内交通における障害の一つが取り除かれ，長野における業務地域は長野大通りを越えて東方の市役所付近まで拡大することになり，都心地域は卍型を呈することになった[17]（第24図）。

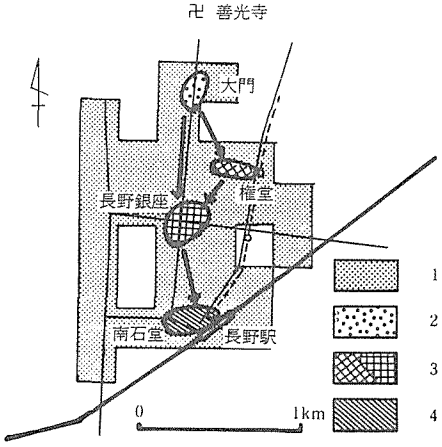
近年における都心の核心地域の移動を，都市内の経済活動を示す指標の一つである歩行者通行量や路線価格からみると，1973年における歩行者通行量の最大地点は長崎屋付近にあった。これが1977年には長野銀座のダイエー前に移動し，1978年には権堂アーケード街に移動している。1980年には一時長野駅前に移動するが，1981年には再び権堂アーケード街に移動した。1982年以降における歩行者通行量の最大地点は，1984年のダイエー前を除くと，長野駅前にある。



第24図　長野の都心地域

また路線価格の最高地点は，1968年には長野銀座の問御所町付近にあったが，1976年には中央通りの末広町から北石堂町までの路線価格と同価格となった。1978年から1984年にかけては，中央通りの南石堂町から末広町・ＪＲ長野駅前までが最高となり，1985年には末広町とＪＲ長野駅前が，1986年以降はＪＲ長野駅前が最高路線価格地点となっている。

以上述べてきたような都心の核心地域の移動（第25図）は，都心交通網の発展と長野都市圏の拡大にともなって生じたものと考えられる。明治期までは善光寺宿の本陣が置かれ北国



1 都心地域　2 1920年代以前の核心地域
3 1976年までの核心地域　4 1976年以降の核心地域

第25図　長野における都心とその核心地域の移動
石澤・小林（1991）

街道の要衝であった大門町が最も栄えていた。昭和初期に長野電鉄権堂駅が開業すると，河東地域からのターミナルとなった権堂町および後町が栄えることになる。そしてまた長野市近郊地域におけるバス路線網が整備されると，長野市南部地域や北部地域に延びる路線網の結節点でありまたその基点となった長野銀座が栄えることになり，長野ではじめての百貨店である「丸光」（現在「長野そごう」）も権堂町から移転開業している。さらに，広域合併前年の1965年に長野市役所が若松町から緑町へ移転すると，県庁と市役所の中間に位置することになった長野銀座の重要性が高まった。

経済の高度成長期において，長野都市圏内の交通機関として自動車交通の比重が高まったが，それは同時にアクセス手段としてのバス交通の比重を下げることになった。さらに長野都市圏が拡大すると，中長距離の公共交通機関として鉄道交通の重要性が高まった。その結果，1980年代以降は鉄道のターミナルであるＪＲ長野駅付近が栄えることになり，「ながの東急百貨店」やターミナルデパートの「MIDORI」も開業している。以上述べたような経緯によって，長野における都心の核心地域が，北部の善光寺付近から南部のＪＲ長野駅付近へ次第に移動しつつあるものと考えられる。

Ⅴ　おわりに

門前町を起源とする長野と城下町を起源とする松代において，近世および明治期以降の都市発展について分析し，その成長過程について検討を加えた。その結果は次のようにまとめられる。

1）長野は善光寺の門前町として知られているが，近世にはすでに，宿場町や市場町としての機能も有していた。長野の人口は，明治初頭の約10年間で30％あまりも増加した。このように長野が急速に成長したのは，県庁がおかれ，現在の長野県北部地域における政治的中心機能を有することになったからである。

2）一方，近世に松代藩10万石がおかれ，長野県北部地域の政治・文化・経済の中心として栄えていた松代は，松代県が長野県に統合された結果，政治の中心としての機能を失った。さらに松代の属する埴科郡役所も屋代におかれたため，松代は郡域の政治の中心としての機能も失うことになった。政治の中心としての機能を失った松代では，士族の流出などにより，明治初頭の５年たらずで人口が約16％も減少した。

3）1888年には信越本線長野駅が開業し，長野はこの地域の交通の要衝としての地位を固めることとなった。松代も鉄道を誘致しようとしたが，1922年の河東線の開通によって，ようやく30年後に実現した。

4）人口の減少した松代では，士族授産事業としての六工社をはじめとする製糸工業を誘致し，工業化により町の振興をはかった。その結果，1910年にようやく明治初期の人口を回復することができた。

5）松代においても人口が急激に増加した時期があった。この一時的な人口の急増は，第二次世界大戦末期の松代大本営工事にともなって松代に軍事・政治的中枢管理機能が移転したことによるものであった。

6）県庁がおかれた長野では，諸行政機関（官公庁）の設置などにより急激に市街地が拡大したが，松代では，近世末期の市街地からほとんど変化がみられない。

7）すなわち，近世末期にほぼ等しかったといえる長野と松代の都市規模の差が次第に拡大していった要因は，工業化などの産業の振興によるところよりも，政治的な中心機能の有無によるところがはるかに大きい。換言すると，都市が成長していくためには，行政的中枢管理機能の存在が重要であるといえる。

8）急激な都市成長をみせた長野においては，都心の核心地域が，北部の善光寺近隣の大門町から南部のＪＲ長野駅付近へ次第に移動しつつある。これは，官公庁が移転したこと，松代が長野都市圏内の副次的中心地の一つとなったように長野都市圏が拡大したこと，そしてまた都市圏内の利用交通手段の変質によるものと考えられる。

本研究を行なうにあたり，長野市企画部統計課，長野市松代支所，長野県立図書館の方々の御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。なお研究費として，平成２・３年度科学研究補助金（一般研究Ｂ）『善光寺門前町における総合的研究』（02451047）の一部を使用した。

注

1） 東京23区を１都市とみなした。

2） ただし書きがないかぎり，10月１日現在の人口数を用いた。

3） 長野市（1925）による。「長野県統計書」に記載されている数値と照合すると，12月31日現在の人口数と考えられる。「日本帝国第十統計年鑑（1891）」には，1889年12月における人口が28,980人と記載されているが，これは市史に記載されている人口数の推移から考えると疑わしい。

4） 埴科郡（1910）による，1882年７月現在の数値である。

5） 小林（1969）や長野県（1987）による。

6） たとえば土産物店や仏具店が並ぶ元善町の仲見世が常設店舗になったのは，明治期になってからである。

7） なお，町制施行時に合併した村のうち妻科村，腰村，茂菅村の人口を加えると長野町の人口は11,370人となり，明治初期にはすでに長野が松代の人口を抜いてしまっていたことになる。

8） 平凡社（1979）による。

9） 更級埴科地方誌刊行会（1967）によると，慶長年間（1600年前後）における城下の最も重要な道路は，谷街道（須坂―大室―鳥打峠―松代）から地蔵峠へぬけるものであり，これを北国街道と称していたという。また，1611年に北国街道が新たに制定されてからは，これが北国裏街道となった。

10） 「長野市の人口」に記載されている第一地区から第五地区までの人口を合算したものである。第一地区から第五地区は基本的には町制施行時の長野の範囲であるが，例外的に旧芹田村中御所地区（岡田町，中御所，中御所１～５丁目）が芹田地区ではなく第五地区に区分されている。このため，合算した人口は長野の実数をやや上回っていることになる。

11） 10)を参照。なお，1990年における中御所地区の人口は，4,422人であるから，長野の実数は35,718人となり，ほぼ1920年の水準まで減少したことになる。また松代との実際の格差は約５倍弱ということになる。

12） 「国勢調査」と「長野県統計書」に記載されている人口は，長野でそれぞれ37,308人と40,350

人であり，約3,000人の差異がある。また松代の人口はそれぞれ8,178人と9,512人であり，約1,300人の差異が認められる。

13）石澤（1988）による。

14）石澤（1990）による。

15）石澤（1980）によると，山形市では，市街地中心部から東方への県庁の移転によって，それまでの中心商店街であった七日町商店街の商業的重要性が下がり，代って駅前商店街の重要性が高まった。

16）政令指定都市ではないが，長野市には地下鉄が走っている。これは，1969年（昭和44）からはじめられた長野市総合都市交通施設整備事業の一環として，1981年（昭和56）長野駅から善光寺下駅までの長野電鉄線を地下鉄化し，この上に片側2車線（一部3車線）の長野大通りを建設したためである。

17）石澤（1989）による。

文　献

石澤　孝（1980）：山形盆地における諸都市の商圏の変化と商店街の業種構成．東北地理，32，11～20．

石澤　孝（1988）：支店の立地動向からみた仙台市中心部における小売業の変容．地理学評論，61（Ser. A），816～829．

石澤　孝（1989）：土地利用からみた都市の内部構造―地方中心都市としての山形市と長野市を例として―．信州大学教育学部紀要，65，51～64．

石澤　孝（1990）：地方町における零細小売業―長野市近郊の信州新町と鬼無里村を例として―．信州大学教育学部紀要，69，79～89．

石澤　孝・小林　博（1991）：都市における宿泊施設の立地と推移―長野市を例として―．東北地理，43，30～40．

浮田典良（1983）：明治期の旧城下町．藤原謙二郎編『城下町とその変貌』柳原書店，60～67．

小林計一郎（1969）：『長野市史考』吉川弘文館．

小林寛義（1985）：『長野県の地誌』信濃教育会出版部．

更級埴科地方誌刊行会（1967）：『更級埴科地方誌』．

長野県（1936）：『長野県町村誌』．

長野県（1987）：『長野県史，通史編第4巻近世一』長野県史刊行会．

長野県教育委員会編（1976）：『信濃の民家』長野県文化財保護協会．

長野市（1925）：『長野市史』西沢書店．

平凡社（1984）：『長野県の地名』平凡社．

松代町（1929）：『松代町史』．

埴科郡（1910）：『埴科郡志』．

（1992年8月31日　受理）